

具体的な授業実践を紹介します。

主題と実際の授業内容は以下の通りです。特に、資料「福澤と勝の主張」にご注目ください。

日清戦争を同時代の視点で考える

一、はじめに

一連の授業の主題は「日清戦争をどう考えるか ～福沢諭吉と勝海舟の視点から～」である。日清戦争は近代日本がおこなった初めての「本格的戦争」であり、この戦争をどうとらえるかは「大日本帝国」の対外・対内政策についての歴史的評価を大きく左右する。教科担任としての明確な視点・角度から、この戦争をわかりやすく説明・解説するという授業も当然考えられるが、できれば歴史的事実にもとづいて生徒自身がしっかり考える授業にしたかった。

そこで、この戦争の「大義」について、二人の人物（福沢諭吉、勝海舟）の異なる見解と根拠を読み取り明確にしたうえで、生徒自身が事実に基づいた検証を行うという授業を構想した。教材・資料として用いたのは、『日本史A』現代からの歴史〔東京書籍〕（2021年は『日本史A』人・くらし・未来〔第一学習社〕）、および文書資料、PP等である。前段も含む大まかな授業の流れは以下にまとめたとおり。

二、日清戦争の授業の前段

1、DVD（知ってるつもり「ガンジーとキング牧師」）を視聴する。

・不服従運動の本質について、考える。

このDVDの視聴と話し合いは「大日本帝国憲法の制定」・「初期議会」の直後に入れた。「歴史は支配する側の視点で描かれる傾向が強い（かつて問題になったヨーロッパ中心史観など）。帝国主義的な支配をする側ではなく、される側の体験や視点をぜひこのドキュメントから受け取ってほしい」、と一言前置きしたのち上映・視聴。

2、植民地支配（帝国主義支配）や差別と向き合う非暴力・不服従運動について、番組内の「特に印象に残った言葉や場面」を出し合う。

生徒たちは、以下のような言葉や場面を出し合った。（ガンジーに関するものを抽出）

ア）力に訴えることなく差別をなくす方法はないのか？

イ）われわれが求めるのは争いではなく、人として当然あるべき平等な権利なのです。

ウ）私は一切（暴力では）抵抗しない。彼らは私を殺すこともあるかもしれない。しかし、彼らは死体を手にしても服従は手にできないのです。（南アフリカ「暗黒法」反対運動）

エ）イギリスの工場で作られた服を買うことをやめましょう。（…）自分の布地は自分で作るべきなのです。

オ）**大勢で糸をつむぐ場面**（たくさんの糸車が回る場面）

カ）塩を我々の手に取り戻し、インド人の自由を取り戻そう。

キ）**イギリスの製塩所で兵隊に向かっていく場面**（兵隊は殴れなくなっていく：映画）。

ク) イギリス人が敵だと思っははいけない。イギリス人が敵なのではなく、イギリス人の考え方が敵なのであって、問題さえ解決すれば必ず良き友人になれる。

ケ) 暴力は何も解決しません。愛、お互いを信頼する心、理性が問題を解決します。皆が共存することが大切なのです。

(番組は締めくくりの場面で) 内戦・他国への武力行使など現実に存在するさまざまな暴力に触れた後、**ガンジーの運動がキングだけでなくさまざまな個人(ベルリンの壁崩壊の中、無血革命を成功させたチェコのハベル大統領、白人との対話によって人種隔離政策を撤廃させた南アフリカのネルソンマンデラ氏ら)へ受け継がれているという映像を流し、最後にガンジーの言葉(「私には見える、闇の中にこそ光が存在するのが」)**を紹介する。

生徒からさまざまに出された意見について、以下のようなコメントを加えてこの時間を終えた。

- ・運動の本質に迫る大切な言葉、場面がたくさん取り出されていること。
- ・非暴力の側面に注目するのは当然だが、それと切り離せない「不服従」こそがこの運動にとって極めて重要だったということ。
- ・ガンジーが「信頼」という時、それは誰に対する信頼か？
生徒の回答〔支配されている仲間、支配する側のイギリス人 - 白人〕のとおりだ。
- ・「私には見える、闇の中にこそ光が存在するのが」というのは、未来の世代(われわれ)に対する信頼ではないか。

三、日清戦争、第一時

最初に、P Pで学習の流れを説明。

1、幕末に活躍した人物について(写真の顔はだれだろうか。)

2、資料読み込み 要約まとめ(模造紙)

- ①福澤諭吉の主張とその根拠と思われるもの
- ②勝海舟の主張とその根拠と思われるもの
- ①・②のどちらかをメインとする(説明できるようにまとめる)

※ **プリント資料と教科書の記述をよく読んでまとめる**
73~75頁

ぜひネット検索したい人は「世界史の窓」を参照すること

班員一人ひとりが模造紙にまとめ、確認しあう

→ わかりやすく内容のしっかりしたものへ改善する(評価)

3、要約したもの(模造紙)を用いて前で説明(メインテーマを中心に)

4、福澤諭吉、勝海舟それぞれの主張をどう評価するか？

事実に基づいた主張になっているか、主張自体に問題はないか？

1、では、西郷隆盛、大久保利通、坂本龍馬、高杉晋作、木戸孝允、勝海舟、福澤諭吉の肖像写真を映示。この導入画像に生徒はよく反応する。若い時の勝海舟、福澤諭吉はなかなかわからないが、「有名な写真」を見ると気づく。

2、資料1をよく読んで、日清戦争に対する福澤諭吉と勝海舟の主張、およびその根拠について2~3人組で確認し合い、模造紙にまとめる。(まとめた内容の例については資料の2を参照)基本的には、資料の内容に基づいて両者の見解・根拠をまとめるようにしたが、ネット上の資料に基づいて補足・補強したい場合は「世界史

の窓」を活用するように（その理由も明らかにして）伝えた。（→資料3）

資料1 日清戦争に対する福沢諭吉と勝海舟の見解

福沢諭吉 日清戦争に賛成

「日清の戦争は文野の戦争なり」〔1894年7月29日 時事新報の社説〕

社説の趣旨：「文野」とは「文明」と「野蛮」。日清戦争は、文明国の日本が、野蛮な国である清（中国）を教え導くための「正しい戦争」である、としたもの。

〔時事新報は1882年3月1日、福澤諭吉の手により創刊された日刊新聞。その後、慶應義塾大学およびその出身者が全面協力して運営した。なお、1885年に発表された「脱亜論」（欧米志向とアジア軽視の主張）については教科書の注記を参照。〕

時事新報の社説本文の抜粋（口語訳で）

※1 戦争は日清両国で起こったとはいっても、その根源は、文明開化を進めようとする者と、その進歩を妨げようとする者との戦いであり決して両国間の争いではない。（…）

本来日本人は支那人（中国人）に対して私怨も敵意もないが、いかんせんかれらは頑迷で道理を理解せず、文明開化を喜ばないだけでなく、反抗の意思表示をしたために、やむを得ず戦争になったのだ。

（日本軍は）海戦で勝利し、一隻の軍艦を捕獲し、千五百の清兵を倒したという。（…）数千の清兵はいずれも罪のない民衆であり、これを皆殺しにするはかわいそうなことである。文明進歩の妨害となるものを排除するために、多少の殺戮も仕方がないというには多すぎる数ではあるが、彼等も不幸にして清国のような腐敗した政府の下に生れた運命としてあきらめるほかない。

もしも中国人が今度の失敗に懲り、文明の素晴らしさを悟って、その非を改めるならば（…）むしろ文明の誘導者たる日本人に対してその恩に感謝することになるだろう。

〔引用者付記〕

同年11月の時事新報には、「文明流の改革のためには朝鮮に対する脅迫を用いざるを得ず、国務の実権は日本が握るべきだ」、「日清戦争の戦勝を願う理由は、（清からの）朝鮮独立、文明開化のためであるにもかかわらず、朝鮮はその決心がなく、もう勘弁できない。「一刀両断」の決意をすることも止むを得ない。」とする社説を載せた。

なお、日清戦争は社説「文野の戦争」が発表された4日前から始まっていた。

勝海舟 日清戦争に反対

日清戦争に際して海舟は詩（漢詩）を作ったが、その中で次のように言い切っている。

その戦、更に名無し（そのいくささらにななし）

=そのいくさ（日清戦争）には全く大義名分も正義もない

〔1894年7月16日、海舟が明治政府に出した意見書の趣旨（口語訳で）〕

日本は（清国や諸外国からの）朝鮮の独立を主張している以上、武力を背景に朝鮮の内政へ干渉することは不当だ。助言だけであればよいが、その場合においても自らの資格を問うべきである。そもそも清国は朝鮮の一揆（農民戦争）鎮圧のために求められてきた。

日本は対抗して出兵したけれど名目は居留日本人の保護だった。その名目とは相容れない大軍を送り込み、あとから朝鮮の内政に干渉しようというのは筋が通らない。

勝海舟自筆の短文（原文）

- ・明治二十七(1894)年夏、これ何の年ぞ。鶏林を蹂躪してその民ますます叛く。
- ・隣国に兵を弄し、無辜（むこ＝罪のないこと・人）死するもの幾人。
- ・国威を震わむとして、露英両国の地歩をなす。 註：「鶏林」は朝鮮の別称。

〔資料（『勝海舟』松浦玲 筑摩書房）〕

「日清戦争にはおれは大反対だったよ。なぜかつて兄弟喧嘩だもの、犬も喰はないじゃないか。たとえ日本が勝ってもどうなる。支那はやはりスフィンクス（註）として外国の奴らが分らぬに限る。支那の実力が分つたら最後、欧米からドシドシ押し掛けて来る。つまり欧米人が分からないうちに、日本は支那と組んで商業なり工業なり鉄道なりやるに限るよ。

〔註：エジプト神話におけるライオンの体と人間の顔を持った神聖な怪物。当時の清は「眠れる獅子」と言われていた。（引用者）〕

そもそも支那五億の民衆は日本にとっては最大の顧客サ。また支那は、昔から日本の師ではないか。（・・・）東洋の事は東洋だけでやるに限るよ。おれなどは◎維新前から日清韓三国合縦（がっしょう）の策を唱えて、支那朝鮮の海軍は日本で引受ける事を計画したものサ。今日になって兄弟喧嘩をして、支那の内輪をさらけ出して、欧米の乗ずるところになるくらいなものサ。」

『氷川清話』勝海舟／江藤淳、松浦玲編（講談社学術文庫、2000年）より

〔引用者付記〕

『氷川清話』は主に勝海舟晩年の談話をまとめたもの。海舟は日清戦争勝利後も、領土要求は欧米列強の新たな侵略をまねくとする立場からこれに反対。彼が予測した通り日清戦争後、欧米による猛烈な中国分割競争が始まる。

下線◎に関連した資料

（幕末 神戸海軍塾設立の直前における）「勝海舟の日記」より口語訳

『勝海舟』 松浦 玲 筑摩書房

「現在、アジア州の中で、欧米に抵抗できる者（国）はない。それは、（国力の）規模が小さく欧米の遠大な策（帝国主義政策）に及ばないためだ。今こそ、我が国から船を出し、広くアジア各国の主に説くべきだ。相互の連携を強め、海軍力を増強し、手段を尽くして学問と新しい技術を研究しよう、さもなければ欧米諸国に蹂躪される流れを防ぐことはできないと。それを、まず隣国の朝鮮に説き、そのあとで中国に説き及んでいこう。」

Q 日清戦争の経緯（教科書の記述等）に照らし、

福澤諭吉の主張と根拠、勝海舟の主張と根拠についてどう判断するか？

福沢諭吉

日清戦争について「賛成」と述べた。

「日清の戦争は文野の戦争なり」(1894年7月29日 時事新報の稿)
「文野」とは「文明」と「野蛮」。

日清戦争は、文明国の日本が、野蛮な国である清(中国)を教え導くため「正しい戦争である」とはもの。同年11月の時事新報には、

「文明流の改革のためには朝鮮に対する脅迫を用いざるを得ず、
国務の実権は日本が握るべきだ」と社説を載せた。

福沢諭吉 日清戦争に賛成

日清戦争は、「文明国の日本が、野蛮な国である清を
教え導くための正しい戦争
である」と唱えた。

金玉均らの開化派とともにクーデターを起こしたが、
武力によって鎮圧されたことに失望した。

↓
このことから清を野蛮な国とした。

戦争に対して

文明進歩の妨害となるものを排除するために、多少の
殺戮も仕方がないと考えた。

しかし、悪いのは清の腐敗した政府であると思っている。

「文明流」の改革のためには、朝鮮に対する「脅迫」を
用いざるを得ず、「国務の実権」を日本が握るべきだと唱えた。

※ 福沢はクーデター派の金玉均を支援していた。

内部から改革に失敗したため外部からの圧力が必要だと主張した。

勝海舟

日清戦争に 反対

[日清戦争に対する考え]

「その戦、更に名無し」

① 日清戦争には全く大義名分も正義もない。

根拠 (反対した)

日本は朝鮮の独立を主張しているため、武力を背景に朝鮮の内政へ干渉することは 不当だ!!

勝海舟の主張

② 相互の連携を強め、海軍力を増強し、新しい技術の研究しよう。

↓
日清韓三国 ^{がっほう} 合系統の策

日清戦争に反対した勝海舟

勝海舟の主張

○ 日清戦争賛成論に対して 反対。

しかし、勝海舟の反対論が政界に影響が及ぼしたのは、一般的に知られていなかったこともあると考えられる。

主張に対する根拠

○ 勝海舟は日本と支那が戦っても、その戦いによって欧米諸国が潰しに来ると考えた。だから支那と商工業を行った方が日本にとって 大きなメリットになると考えた。

もし戦わず商工業を行っていたら 支那5億人が商売相手になったと考えていた。

○ 勝海舟の詩によると、

「その戦、更に名無し」

日本は朝鮮の独立を主張している以上、武力を背景に関与することは不当である。

三、日清戦争、第二時

3、それぞれの主張・根拠についてまとめた資料（模造紙）を用いて発表する。

自分がまとめた資料なので、生徒たちは要点を分かりやすく説明する。時おり、発表者としての意見も入る。「勝海舟のとらえ方は適切だと思う」、「福沢諭吉を一万円札の顔にするのは相応しくない、」など。

4、両者の主張をどう評価するか、主張や根拠に問題はないか等、教科書の記述に沿って検証し、発言する。（本報告では教科書のコピー画像は割愛）

出された意見・内容は以下のようなものだった。（複数の講座の意見をまとめて）。

〔話し合われた内容〕

・勝海舟の主張に賛成

（理由）

- ①日本と清との戦争なのに、朝鮮が戦場になっている
- ②清は朝鮮政府に派兵（応援）を要請されたが、日本は要請されていないのに出兵した
- ③農民軍と朝鮮政府は歩み寄って和解し日本軍に撤退を要請したが、日本軍は応じなかった。
- ④日本軍は漢城の朝鮮王宮を占領し、宣戦布告なしに（豊島沖で）清の艦隊を攻撃した
- ⑤勝のいった通り戦争後「列強はあいついで中国に進出し、鉄道敷設や鉱山開発などの権利を獲得した」
- ⑥植民地支配は不当であり、それを防ぐには日中韓の連携が必要だという考え方は正しい。
- ⑦日本は朝鮮の独立を主張している以上、武力を背景に朝鮮の内政に干渉することは筋が通らない。

・福沢諭吉の主張に賛成

（理由）

- ①福沢は朝鮮国内の「開化派」（独立党）を支援しておりそのクーデタを保守派と清軍が鎮圧したのは事実。
- ②日清戦争で殺された清の兵に対して同情している。
- ③朝鮮や清は遅れた国なので、同盟は現実的でない。（ともに帝国主義に対抗するというのは理想的だが。）

高校入学までの基礎知識においては、「日清戦争が大きな問題をはらんでいた」という認識はあまり持っていなかったようだが、このたびの検証・意見交換には、「この戦、さらに名なし」と言い切った勝海舟を支持する者が多数、福沢諭吉を支持する意見は少数だった。

5、当時において、なぜ福沢諭吉の考え方が多数を占め、勝海舟の考え方が広がらなかったのか、その理由を問いかけながら話をする。

「『時事新報』が良く読まれていた」とか「勝海舟の考えは当時一般には知られていなかったから」、「戦争前はどうしても反対論よりも賛成論が強くなる」といった意見が生徒から出る。特に三番目のものに関しては注意すべきだと確認。最後にガンジーの言葉を引用しながらPPも用いて、以下のように問題を提起。授業のまとめとした。

ガンジーの言葉

「イギリス人が敵だと思ってはいけない」

「あくまでも敵は“彼らの考え方や行爲”であって、問題さえ解決すれば、必ず良き友人になれる。」

「彼らの考え方」とはどんな考え方だと思おうか？」

福沢諭吉（日清戦争に賛成）

（理由）日本は文明、清国は野蛮
朝鮮の実権は日本が握るべきで、脅迫も当然

中国・朝鮮の近代化を待つ余裕はない
⇒日本はアジアを脱して欧米と行動を共にすべき
（植民地を獲得するなど 欧米に追いつける）

勝海舟（日清戦争に反対）

（理由）アジア諸国と協力して力をつけ、欧米とも対等平等な国際関係を築いていくべき
（欧米によるアジアの植民化は不当）

日清戦争には全く正義がない
アジアでの戦争（日清戦争）の結果、欧米による（清の）植民地化が進むだろう

福沢諭吉の言葉を再度確認してみよう。「日本は文明、清国（及びそれと結びついた朝鮮政府）は野蛮」、「朝鮮の実権は日本が握るべきで脅迫も当然」。ここで日本をイギリスに、清国や朝鮮をインドに置き換えてみると、まさに福沢諭吉の考え方こそ、ガンジーが敵だとした「彼らの考え方」ではないか。しかし当時、多くの日本人は「この考え方」に染まっており、ここにいる皆の多数が支持した意見（勝海舟のような意見）は広がらなかった。

それとは逆に、ガンジーとキング牧師の運動が広がった理由は何だろうか。（間）支配されていることには強い実感が伴うからではないか。「人間としてあるべき当然の権利」を唱えるガンジーの言葉や行動に対する共感は、「支配される立場」だったインドの人たちには広がりやすかった。それに対して、「支配者であるイギリス人」（キングの場合には白人）へ通じていくためには多くの時間が必要で、ガンジーの不服従運動が始まってから、独立までにかかった年月は28年間だった。

ひるがえって、日清戦争当時の多くの日本人だが、いつの間にか（自由民権派も

含めて)「支配する側の立場と視点」、自らを高く相手を低く見る発想(日本は文明、清国・朝鮮は野蛮)に染まっていたのではないか。そのような場合、支配する側の不当性を自覚・認識した上で、支配される側の苦しみに共感することが難しくなる。

現在にも通じる点はないだろうか。まさに、「歴史を公正に見られない人たち」が増えているようにも見える。いつの間にか、支配する側の視点、自らを高く相手を低く見る発想に染まって歴史や現在を見ているのではないだろうか。

四、おわりに

1980年代に「教科書検定問題」〔文部省(当時)が、教科書執筆者に対して大日本帝国の「アジア侵略」を「侵入または進出」に、「3・1独立運動」を「暴動」に書き換えるよう「指導」していた事実〕が国際問題になった。「勇気をもって自らの歴史と向き合う」ことを提唱したワイツゼッカー大統領のもと、西ドイツ(当時)が積み上げていた歴史教育(周辺の戦争当事国からも尊敬されていた姿勢)とは対照的な、「世界では全く通用しない自己正当化に満ちた検定」に対してアジアのみならず多くの国々から批判されることになった。

当時、学生だった私は、「極めて恥ずべきことだ」と憤っていたものだが、多くの報道機関もこのような検定に関しては批判的で、一般民衆も「中国や朝鮮が厳しく言うてくるのは当然だよな」という感覚は持っていた。

ところが今はどうだろうか。3・1独立運動、徴用工問題、従軍慰安婦問題を捉える際に「韓国は‘反日’」だから歴史をゆがめている、「いつまで歴史認識の問題を言うのか」といったネット上の発信など当たり前のようになされており、さらには在日の人々へのヘイトスピーチ、いやがらせなど本当に恥ずべき事態が進んできた。

「従軍慰安婦」は教科書の記述からほぼ消され、「関東大震災時に虐殺された人々の追悼式典」への追悼文送付を拒否する人物が圧倒的多数の支持で都知事に当選する。

このような状況になった背景にはここでは触れないが、事実をしっかりと学び、「世界に通用する歴史観」を育てていくことが重要な課題であることは、言をまたないであろう。本来果たすべき教育の役割をいかに創りなおしていくか。ともに考え、実践していきたい。

資料3(「誰がどんな意図で作成したか」がわかり情報が信用できると考えられる)
HP「世界史の窓」における主催者紹介

「Y-History 教材工房」は高校の地歴科で使用する教材の開発と、歴史教育にわずかながらの提言をするグループです。主催者は、横浜市の私立高等学校・予備校・塾などで長く教諭を務め、現在はフリーです。(…)現役の高校生の皆さん、大学・高校・予備校・塾で教えている先生がたのお役に立ちたいと、このサイトを立ち上げました。(…)ご利用を検討している方、ご協力いただける方は、お問い合わせ欄からメールでご連絡下さい。」